



日本原子力研究開発機構
理事長

殿塚 猷一



ロゴマーク覚え書

“新”原子力機構のロゴマークは、J A E Aの字体を囲むブルーの楕円の周辺に2本の羽根が囲んだデザインである。デザイナーによると、ブルーの色調と羽根の先端にドットされた赤色がポイントであるそう。

このデザインが決定されるまでには、統合前の準備関係者諸君が侃々諤々の末、広く職員からデザインを公募した上で採用案を絞り込んで専門家にみてもらう方針でことは進んできた。

公募の結果、200点ほどの応募があった。機構の職員には芸術的センスに優れた人も多いようで、なる程と唸るようなデザインが多数集まったのである。

選考のすえ、原子力を象徴する原子核の周りを電子が3個ほど回っている案と結果として採用された原案の2つに絞られた。この2案は、いずれも甲乙つけ難いものと思われたが、最終的には「理事長となるべき者」としての私に決定が委ねられた。統合直前のことで、あれこれと決断すべき事項の多い中で、私が思案したことは、先ずデザインとして洗練されていること、次に新しい法人のロゴマークであるから既にある同類の印象を与えるものは避けて、未来思考に連なるものが望ましいこと、そして第3はデザインの中にフィロソフィーが読み取れるもの、ということで選定させてもらった。

さて、そのフィロソフィーとは？ 私は、楕円型が持つ意味合いに私の思いを重ねた。新組織は、旧2機関の統合によって成り、対象領域が科学と技術の2分野に亘ることから中心が2つ存在することになるが、一体化される新組織の中に於いては融合体の中での2点として存在しなければならない。中心が2つあってなお一体となっている楕円は「融合と協力」をスローガンと考えていた私には相応しいものと思えた。

更に踏み込んで述べるならば、そもそも人間は古来その思惟の中で形而上的に二元論の哲学を深めてきたということである。中国には古くから陰陽の二元論的宇宙観がある。森羅万象は全て陰と陽からなるという哲学だ。

思惟の表現を卑近な例に求めるならば「天と地」「存在と無」「混沌と秩序」「プラスとマイナス」更には「肉体と精神」「明と闇」「光と影」など枚挙にいとまが無いが、対極的に事物をみる表現の背景には二元論的哲学が存在するからであろう。

21世紀の世界は価値観の多様化が尚一層進むものと予想されるが、こうした環境状況の中での規範は、個の主体性を堅持しつつも、一方で他との協力を忘れる事のない自己の確立が求められる、いわば2つの中心をもつ時代であると言われている。

楕円のロゴマークには、このような思いを込めたつもりである。